

二つの事例における知覚的経験の幾何学

池知翔太郎 (Shotaro Ikeji)

東京大学

人は対象のうちにサイズや形状といった空間的性質を知覚し、空間的な知覚的経験を持つようになると思われる。空間的な知覚的経験には、見かけのサイズや形状に関係した比較的馴染みのない問題が存在する。そしてそのような問題を考察するために、文献の中で頻繁に取り上げられてきた二つの具体的事例がある。この発表では、それらの二つの具体的事例に共通する問題を論じる。

その二つの具体的事例は、次のようなものである。一つの実例では、物理的に同じサイズの二本の木が知覚者から異なった距離にある状況を想定する。こういった状況では、人は、一方で遠くの木の方が近くの木よりも小さく見え、他方で両者が同じサイズにも見えるというような知覚的経験を持つと思われる (Peacocke (1983) など)。このような事例を木々事例と呼ぼう。もう一つの実例では、机の上に置かれた円形のコインや皿が、角度をつけて見られるという状況を想定する。こういった状況に関して、斜めの角度から見られたコインや皿が、一方では円形のままだに見えるように思われ、他方では楕円形に見えるようにも思われると報告される場合がある (Noë (2004) など)。このような事例をコイン事例と呼ぼう。(コイン事例に関しては、斜めの角度から見られても対象が円形のままだにしか見えないと報告する者 (Smith (2002) など) も、楕円形にしか見えないと報告する者 (Prinz (2012) など) も存在する。)

これらの二つの事例には、何らかの共通の哲学的問題が存在するということが前提されてきた。それにもかかわらず、実際に何が共通している問題であるのかは、あまり明示されてこなかったと思われる。確かに、これらの二つの事例には、大まかには、見かけのサイズや形状に関する問題という特徴付けによって捉えられるような共通の問題が含まれていると思われる。しかし、その程度の抽象的な特徴付けを超えて、具体的にどのような共通点があるのかということは、さほど明確化されてこなかった。

これらの事例に何らかの共通性が存在するということが真であると思われるが、その共通性をどこに見出すのかには慎重であるべきである。というのも、どのような共通性が存在するのかを確定することによって、どのように問題が解かれるべきであるのかということも決定されてしまうと思われるからである。例えば、コイン事例も木々事例も、知覚者の異なる空間的位置から異なるサイズや形状が知覚されるという問題であると位置付ける見解がある (Schellenberg (2008))。この見解は、空間の中での知覚者の移動によって対象に関する知覚的経験が変化することに不思議を見出す。だから二つの事例に共通する問題は、なぜ空間の中での知覚者の移動がそのような変化をもたらすのかという一つの問題として理解され、その解決のために対象の持つ特殊な空間的性質の存在が肯定される。

そのように問題を設定してそれを解くということが全く成り立たないと考える必要はない。しかし上の二つの事例において、これとはまた別の仕方で共通性を見出すということが可能であると思われ、そのような見方にも相応の長所があるのではない。元々の木々事例においては、知覚者の異なる空間的位置などは登場していなかった。確かに知覚者から二本の木までの距離が等しい地点からそれらの距離が異なるような地点へ知覚者が移動することによって、知覚的経験に何らかの変化が生じるかもしれない。しかし、一つの地点から見られた二本の木に関して、既に問題が存在していると思われたのである。

この発表では、複数の空間的位置を前提としない場合でも、対象が複数の異なるサイズで現れうるように思われるのはなぜであるか、という問題を二つの事例の中に見出すという方向性を検討したい。これは、例えば、コイン事例における円の直交する半径や楕円の長径及び短径が、木々事例における二本の木に相当すると見なすことなどによって可能になると思われる。同じサイズのものが異なるサイズにも見えるように思われる現象としてコイン事例を理解することによって、やはり二つの事例に共通の一つの問題が論じられることになる。

二つの事例に共通している問題を、複数の空間的位置から知覚されうる見かけのサイズや形状の問題というよりも、むしろ一つの空間的位置から知覚されうる複数の異なるサイズの問題と捉えることも、やはり問題解決の方向性を決定する。そもそもサイズや形状は、典型的に幾何学的な概念であり、知覚的経験の中でのサイズや形状の問題は、知覚的経験の幾何学の問題であると思われる。だから、大まかには、知覚的経験に現れる複数の異なるサイズが複数の異なる計量の幾何学に訴えることによって説明されれば、問題が解決されたことになると思われる。この解決の方向性は少なくとも単純であるという点で望ましいだろう。この発表では、もし知覚的経験の中で働きうる複数の異なる計量の幾何学が認められるならば、それだけで上の二つの事例に関して従来想定されてきたような哲学的問題が発生しなくなるということを示す。もしこれが正しければ、これらの二つの事例に関わる共通の問題は、実は想定されていたような新しい哲学的道具立てを必要とするものではなかったということになるだろう。

参考文献

- Noë, A. (2004). *Action in perception*. Cambridge, MA: MIT press.
- Peacocke, C. (1983). *Sense and Content: Experience, thought and their relations*. Oxford: Oxford University Press.
- Prinz, J. J. (2012). *The conscious brain*. Oxford: Oxford University Press.
- Schellenberg, S. (2008). The situation-dependency of perception. *The Journal of Philosophy*, 105(2), 55-84.
- Smith, A. D. (2002). *The Problem of Perception*. Cambridge, MA: Harvard University Press.